

2021年10月17日（日）主日朝礼拝説教

『いちじくの木と神殿』井上隆晶牧師
エレミヤ7章4～11節、マルコ11章12～19節

①【実のないいちじくの木～実とは何か～】

先日、まだ暑かった時のことです。サザンカが咲いたとテレビで言っていました。サザンカは冬に咲く植物です。気候温暖化の影響なのか最近の植物はおかしいですよ。地球全体のバランスが狂ってきているのかもしれませんが。イエス様の時もそんな事があったようです。

イエス様たちがベタニア村からエルサレムに行く途中のことです。朝早かったのでお腹が空いてしまいました。ふと道端にあったいちじくの木を見ると、実のなる季節ではないのに葉が茂っています。いちじくは夏と秋に実をつける二種類があります。「無花果」と書きますが、花が咲かないわけではなく、花は果実の中にできるので外からは見えません。時には葉が出る前に冬眠していた実が先に出ることもあるそうです。イエス様が見た時は春でしたから、まだ実はないはずなのに葉が茂っていたので、実もあると思ったのです。ところが葉のほかは何もありませんでした。そこでイエス様はその木に向かって「**今から後いつまでも、お前から実を食べる者がいないように**」と言われると、翌朝には枯れてしまったということです。これは「腹が立ったので枯らしてやった」という訳ではないのです。実、この実のないいちじくの木は、次に出てくる神殿を清める話とつながっていて、ユダヤ教の形だけで実のない信仰を象徴しているのです。ユダヤ教は立派な神殿を持ち、律法と神の言葉を持ち、礼拝も立派で、献げ物も多く、外見はすばらしく見えていたのですけれども、中身がありませんでした。つまり実が結んでいなかったのです。実とは何でしょう。「**霊の結ぶ実**は愛であり、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制です。」（ガラテヤ5：22）特に愛と喜びと平和はその特徴です。

●アレキサンドル・シュメーマンはこういっています。「そもそもの最初からキリスト教は、喜び…の告知だった。…この喜びの告知なしに、キリスト教は理解できない。教会がこの世に対して勝利しているのは、まさにこの喜びによる以外の何ものでもない。教会がこの喜びを失い、喜びの証し人であることをやめてしまった時、教会はこの世を失ってしまう。ニーチェは言った。『キリスト教徒には喜びがない』…福音書は『見よ、すべての民に与えられる大きな喜びをあなたがたに伝える』と語りはじめ、『彼らは非常な喜びをもってエルサレムに帰った』と結ばれている。」

クリスチャンの特徴は「喜び」です。この喜びとはいつも私たちが言っている「私たち死なないのです」という喜びなんです。

②【神殿を強盗の巣にしている】

イエス様は神殿の境内に入りました。そこでの光景を見てイエス様の中に激しい怒りが込み上げてきました。境内の中で売り買いしている人たちを追い出し、両替人の台や鳩を売る者の腰掛をひっくり返されました。また境内を横切って物を運ぶことを許しませんでした。イエス様がこんなに大暴れをするのはここだけです。よっぽど腹が立ったということでしょう。何に憤られたのでしょうか。ユダヤ人は外国人を汚れていると見下していました。彼らのお金も汚れていると考えたので、ユダヤのお金に両替させ、両替商が店を開いていました。外国人や貧しい人たちが献げる動物は汚れており、傷物で駄目だと考えたので、神殿側が許可した高価な動物を売っていました。また参拝者も遠くから献げ物の動物を持ってこなくて良いように、境内の中で売っていました。商人たちは、商売道具を運ぶのに神殿の境内を横切れば店まで手っ取り早かったので、境内を横切っていました。彼らは場所代として神殿に売り上げの何割かを納めていました。宗教的指導者たちにとっては寺院を運営してゆく上の貴重な財源だったと思います。彼らも一つになってそれをしていたということになります。彼らは口を揃えて言うでしょう。「一体何が悪いのだ。参拝客も助かるし、寺院経営者も、商売人も皆助かるではないか。」そこでイエス様は「**こう書いてあるではないか。『わたしの家は、すべての国の人の祈りの家と呼ばれるべきである。』ところが、あなたたちはそれを強盗の巣にしてしまった。**」(マルコ 11:17)と言われました。神殿はすべての国民の「祈りの家」であるべきなのに、「強盗の巣(商売の家)」となり果てていたのです。彼らは外国人の祈りの場である境内で商売をしていました。外国人はうるさくて祈れなかったと思います。イエス様には、神様が利用されることと、外国人が踏みにじられることが耐えられなかったのだと思います。そこには神に対する愛と畏れと慎みもなく、隣人を愛する慈しみもありません。すべては自分の利益の為に神も人も利用していたのです。

③【本物を持っているだけでは本物の信者ではない】

ユダヤ人の信仰がいかに偽物であったか知ることが出来る話が、この後に出てきます。イエス様が神殿の境内にいた時に、ユダヤ教の祭司長、律法学者、長老たち、つまり宗教的権力者(指導者)たちがやって来て、「**何の権威で、このようなことをしているのか。誰がそうする権威を与えたのか**」(11:28)と詰問を受けました。商人たちを神殿から追い出したので、彼らが祭司長たちに訴えたのでしょう。誰の許可を受けてそんな行動をしたのか、そもそもお前は勝手な宗教活動をしているが誰が許したのか、と言われたのです。神殿の中で宗教活動をするには彼らの許可を受ける必要があったのです。そこでイエス様は逆に彼らに質問しました。「**洗礼者ヨハネの洗礼運動は神からのものか、それとも彼が勝手に人間の思いでやったことか?**」彼らは話し合いました。「**神からのものだ**」と言えば「ではなぜ、あなたは従わなかったのか」と言われます。「**彼が勝手にやったことだ**」と言えば、**群衆はヨハネを信じていたので、群衆を敵に回すことになります。そこで彼らは「分からない」と嘘をいいました。本当は、洗礼者ヨハネの運動は神か**

らのものだとは分かっていたのです。でも、自分たちの地位や権威を失うのが怖いので、ヨハネに従わなかったのです。

彼らにとっての宗教とは何だったのでしょうか。宗教をする意味は、真理を求め、真理に従うことではないのでしょうか。真理とは何か？神でありキリストです。神を求め、神の言葉に従うのが宗教の目的です。「神と隣人を愛せよ」とあの方は言われました。それに徹底的に従うことが神の御心です。でもユダヤ教の指導者たちは立派なことはいいますが愛の実践がなく、見かけは神に従っているようですが、実際は神に従おうとしません。自分を正しい者とし、高慢になって回心しようとしません。それが宗教者でしょうか。偽り者です。本物のふりをしていますが、中身は嘘で満ちています。そのような者にイエス様は沈黙し「私も言うまい」(11:33)と口を閉じて相手になさいません。神は真理を求め、正直になり、神に従おうとする者にご自身を現し、信仰の奥儀を教えてください。

●私は教団からは「変わった牧師」だと言われています。祭服を着ることは「コスプレ」だと思われています。逆に正教会の神父からは「祭服を着たからといって正教会になれるのではない。あそこの教会は偽物だ。」と言われています。皆自分が「正しい、正統である」、自分たちの許可を得なければ宗教活動をするのはおかしい、といえます。本当でしょうか。彼らは自分こそ「真理の管理者」だと主張します。正教会は確かに「真理」を保有しています。「典礼、神学、祈祷文、伝統」を持っています。でも生かしていません。ユダヤ教徒だって「神殿、典礼、聖書」を持っていました。ただ持っていれば本物の信者になれるのでしょうか？大聖堂を任せられればそれで本物の信者なののでしょうか。聖書は「本物」です。でも持っているだけならホテルの結婚式場でも立派な聖書を持っています「本物を持っているから本物の信者」なのではなく、「本物に従って生きようと努力する者が本物の信者」なのです。

聖書はいちじくの木に実が無かった理由を「季節ではなかったからである」(11:13)と言っています。人間の力では人は実を結ぶことはできません。キリストによって始めて人は実を結ぶことが出来るのです。キリストの到来により実を結ぶ時がやってきたのです。主ご自身が「時は満ちた」(マルコ1:15)といわれたからです。パウロも「今や、恵みの時、今こそ救いの日。」(Ⅱコリント6:2)と言っています。悔い改めとは、過ぎたことを悔やんで座り込むことではなく、全身をキリストに向かって歩き出すことです。自分の欠点を嘆くことではなく、顔を上に向けてキリストの愛に期待することです。「そのようになり損ねた自分」ではなく、今やキリストの愛と力によって「そのように成れる自分」を仰ぎ見ることです。私たちは実を結ぶことができます。私たちの苦労は無駄にはならないのです。それを喜び、期待して生きてゆきましょう。